

2013年度名古屋フルブライト・アソシエーション講演会

愛知大学 車道校舎（13F第3会議室） 6月16日（日）午後3時50分

フルブライトの信念：アーカンソーを旅して

Fulbright's Trinity: A Sentimental Journey to Arkansas

四国学院大学名誉教授 加瀬豊司

Toyoshi Kase, Ph.D. Professor Emeritus, Shikoku Gakuin University

はじめに

フルブライター、EWCの方々、また一般公開で来ていただいた皆様、今日は。紙媒体の資料を使いながら、フルブライトの出身地、米国アーカンソー州の旅から「フルブライト」について思ったところ、思うところの一端を述べさせていただきます。特に国際人物交流、国際主義の根底にあるフルブライト精神から、すこしフルブライト自身の“情念”みたいなものに加え、フルブライト氏の内面の信念に思いを馳せてみたいと思っています。その信念の3要素を Trinity（三位一体）として、3つにこだわった英文題にしてみました。



講演全体の要点も可能な限り3つのポイントに纏めてお話させていただきたいと思います。今回3つのこだわりの熱情？（obsession）は、ちょうど2週間前国務省のステート・アラムナイのリーダーシップ・セミナー（State Alumni '13 Leadership Seminar「パウエル元国務長官と松下幸之助」米国大使館・松下政経塾(会場)共催）の「パウエル語録」からそのエネルギーをもらいました。パウエルの情熱の部分（解決部分の一体化がセットになったワンセンテンス）の原文は“Get mad, then get over it.”（Colin Powell）でした。少し mad になって、すこし熱くなって、テーマとして関わったそれぞれの3つが全体として分かりやすくなるように考えていきたいと思っています。

「フルブライトの足跡」を辿ったアーカンソーの旅の全体は Fulbright Japan（日米教育委員会）発行の年刊（機関紙）最新号（*The Fulbrighter*, Spring 2013, No. 31）に掲載＜配布資料＞されていますが、本日の中身はフルブライト氏の信念に関わる重要部分を除き、新たな内容を中心としています。機関紙で述べきれなかった領域に若干私見等をお交え sentimental journey 風にも話してみようと思っています。

＜この講演記録の見出し以外のすべての**太字**は筆者による。下線も。また講演会当日の配布した資料の中で時間的に触れることのできなかつた部分をこの記録文中に補足した。

現在かなり（一般）社会認知されてきているギアツの「厚い記述」（“thick description”, Clifford Geertz）の表現形態を参考にした。“文化”理解のためにはその行動そのものだけではなく、文脈の層を含めた記述を目指す。単なる“しつこさ”に終わるのではなく、もう一步踏み込んで“つつこみ”を入れた（象徴）解釈的スタンスで多角的に組み立ててみた。また旅で感じた「感受性」を大切にしたい“ルポ”とも思っている。ただ講演者の背景（言語・文化：アメリカン・スタディーズ）により言語・文化の側面が多くなるが（そこに“hang around”しすぎたのかもしれない）お許しをいただきたい。講演後の質疑応答にあったアーカンソー州内の大学については、英文の正式名称を追加してはっきりさせた。>

大幹線でむさぼる白昼夢

ノーベル文学賞作家のスタインベックは60歳になってアメリカ1万マイル（1万6千キロ）の自動車旅行をし、その時の作品でこんなことを述べています。移動しながらの思索旅行といってもいいでしょう。

“人びとは車を運転しながら何を考えるだろうか。短いドライブなら、目的地に着くこととか、出発地点のできごとを考えたりするだろう。ところが、大変長い距離の自動車旅行ともなると、白昼夢をむさぼる余裕がじゅうぶんになり、それに思索さえできる。”

（ジョン・スタインベック著、大前正臣訳『チャーリーとの旅：アメリカを求めて』サイマル出版会、1962）

陸路：合わせて一万マイル

ワシントンから

（1）スタインベックのマイレージにあやかり、先ず、前回（2007年8・9月、2008年1月）の6千マイル達成自動車旅行を皮切りに、マイレージ累積の旅にしました。先回は太陽に罰せられたような大地や風化作用のbadland（雨裂で）やdevil's canyonと呼ばれる激しいところ（アメリカ大陸西半分）走っていました。太平洋戦争時の日系アメリカ人の強制収容所跡地はそんなところがありました。

（2）今回（2012年10月～2013年1月）、4千マイル走り（アメリカ大陸の東と南半分）、合算して「1万マイル」になり、“老少年”の夢達成で浮かれ気分を味わっています。今年1月までの3ヶ月間、旧友・友人との再会、日系2世の取材（オーラル・ヒストリー）、出身大学訪問およびの恩師の方々との食事会、教会での説教奉仕（メリーランド州、バージニア州、D.C.）等、近場の日常生活はワシントン義姉宅を中心にさせてもらいました。また娘のAFS時代のホストファミリーの入院見舞い（ペンシルベニア州）、大学時代（日本）の恩師訪問（フロリダ州）、神学校の教授出身の大学訪問（オクラホマ州）、親族訪問（イリノイ州、ワシントン在住の義姉と）、親族関係（クラーク博士）地訪問（マサチューセッツ州、日本より同行した義姉と）等々はアメリカ北東部、中西部、南部を妻と義姉2人（それぞれの部分に合流）とで旅行する形になりました。あれこれ欲張って詰め込んだ3か月

の旅の中心にフルブライトのゆかりの地、アーカンソー州の訪問を計画しました。

(3) 先回のアメリカの岩石砂漠地方をひたすら運転し続けていたのとは違い、今回の旅行前半は“変化に富んだ”旅でした。“町と木”がある事自体が感動でした。アメリカ大陸の州をまたがるハイウェイのルート番号は東西が奇数で南北は偶数になっています。今回はワシントンから、まず大西洋沿岸に沿って南下しました。インターステート・ハイウェイ (I 85 South) です。全米の州をつなぐこれらの大幹線は Dwight David National System of Interstate and Defense Highway が正式名称で、災害や国防の危機管理の対策の一つにもなっています。

テネシーを經由

(1) テネシーに本部を持つカントリー・ストア&レストランの「クラッカー・バレル」(Cracker Barrel) で昼食をよくとりました。この店は南部に本部があり、レストランの中央に大きな暖炉があり、勢いよく火が燃えています。最初行ったときは横に3世代の家族が楽しそうに食事をしていました。目が合ったので“Hi.”だけの挨拶でしたが、4歳ぐらいの女の子を暖炉を背にしての写真撮影が始まりました。国を超え、そのほほえましい光景に目をやりながらゆっくりランチを食べていたところ、いきなり「あっちっ、熱い！」とその子は火の前でポーズをとるのをやめ、大騒ぎになりました。子ども(孫)の状態よりも記念写真に夢中になる親の愛情に爆笑し合い、その家族と親しくなり団欒を楽しみました。子どもは大人世界の距離感をときほぐす文字通りの“icebreaker”と感じました。我々も昔、初めての海外旅行で子供達(2~4 & 4~6歳)がきっかけで、友人ができたフルブライト留学生活をしみじみ思い出しました。親ばかりであれ、何であれ、ばれてしまった本音で腹を抱えて笑いあい、後は腹を割った話ができるようになるのは世界各国共通。

(2) チェーン店のカントリーレストランから個性豊かなファームハウス&レストランでも食事をしました。レストラン内部のファームの店で思いかけない缶詰を見つけました。缶の表に otter (カワウソ) の絵がかいてありました。一見製造会社のマークとも思いましたが、お店の人に聞いてみました。その動物の肉でした。高校時代に習った早口言葉 (tongue twister) を思い出しました。A canner can can anything he can can, but he can't can a can, can he?

(缶詰製造人は何でも缶に詰めるが、缶に缶を詰める事はしませんよね) 次の瞬間、この初老の体格のいいおばさんは耳元で小声で“I ate 'em when a kid.” (“アメリカ南部ではナマズ、ウサギ、ワニは食べるとは聞いていましたが・・・(加瀬))。食習慣の今昔物語も地方ならではの気さくで、フレンドリーの自己表現と認識。“秘密”の情報開示でこの方とも親しく話が弾んだ事は言うまでもありません。

(3) テネシー走行中もう一つの歴史の自己表現を見つけました。忽然としかも誰の目にも触れるように現れた3本の巨大な十字架がよく目にはいつてきました。アメリカ南部は教会が多い所(バイブルベルト)と聞いており、実際に多くの教会が目に入りました。十字架、しかも3本の荒削りの十字架がごく普通の家の庭先に立っている姿は新約聖書の歴史そのものの再現で感無量でした。真ん中のイエス・キリスト、片側に自分を呪い、神を呪

っている男、もう片方には自分の過去を悔い、十字架上の罪なきイエスに自分を覚えていてくださいと告白した男——人生の最後の極限状態におかれた二人の男のコントラストは、今も変わらぬ光と陰の人間模様を思い起こさせ、個人の中にも二つに揺れ動く心の内面を揺さぶられる思いがしました。<2012-13 Season's Greetings from Kase Fam, "Merry Christmas and Happy New Year"より>

アーカンソー周辺

(1) いよいよ目的地アーカンソーに近づきました。Arkansas: アーチ→レインボーの美しさが本来の意味です。使用域によっては(西海岸あたり)では rainbow は sexual orientation の用語にもなっているようですが、こんな“象徴”言語に関係なく本来の意味がそのまま生きているのはうれしい事実と受け取っています。

(2) 次にメンフィス、リトル・ロックを素通りして本当に“延々と続く” I 40 West で西へ西へと進みました (motoring west)。オザークス山地 (アーカンソー州、オクラホマ州、ミズーリ州、カンザス州にまたがる) にはいました。“That's the place I wanna go last.”!? (行きたくない事のポジティブな修辭法?) という人もいますが、ロッキー、シエラネバタ、アパラチアの次いでここは内陸の大高原 (標高は800メートル弱ですが)。何もなかったフラットなところに、いきなり地平線を妨げるように覆いかぶさっている大高地でした。イノシシのような、ブタのような razorback (アーカンソー大学のマスコット) がでるのはこのあたりか、さもありませんと心の中で呟きながら走っていました。このオザークス地方から落ち着いた大学町フェイエットビル (Fayetteville) に、更にスピードをはやめた 540 号線。やっと目的地に着きました。

(3) フェイエットビルは“道と牧場”が落ち着いている静かな町。オザークス山地のやや北西の麓にこの町は位置し、趣があります。更に少し北西 (オクラホマ方面) を覗けば、かの Historic Route 「ルート66」がはじまる歴史街道 (もちろん今も通行可)。スタインベックの『怒りの葡萄』に登場する西部に向かう“幌馬車道” (“The Mother Road”) や ガソリンの Phillips 66 等々を思い起してくれる道路環境です。更なる歴史の再現には「ルート66」のカントリー・ソングが歌われ続けています。

If you ever plan to motor west

Travel my way, take the highway that's the best

Get your kicks on Route Sixty-six (前述のパウエルの “Get mad.” の情熱共有?)

大学とフルブライト

***アーカンソー大学 (The University of Arkansas)** *<アーカンソー州のリトル・ロックおよび近郊には University of Central Arkansas (3度改名し、その途中でアーカンソー州立大学 (State College of Arkansas)の時代もあった) や University of Arkansas at Little Rock がある。州の東には University of Arkansas at Fort Smith もあるが、フルブライト関係の大学は Fayetteville にある The University of Arkansas>

(1) 国内外の大学キャンパスでは道に迷うのが常態化しているのが私です。しかし聞く前から “Don’t ask me the way.” は今回が初めてでした。迷ってしまったので、道を尋ねようと見つけた人は大学生協 Open Cafe でお茶中の男性。そばに行った途端、この言葉でした。「自分もはぐれてしまった。妻にここから携帯しようと思っていたところ」。会話の“回避”を美德と考えず、“Friendly, open, ready to talk.” がアメリカ大陸中央の南にあるアーカンソー大学とこれまた感動。道案内の穿った皮肉：“道をよく知っている人に聞くとかえって分からなくなる”等と考えるのは、すれた都会人の発想なのでしょう。ともかくこの後、道を尋ねた人達も皆親切で感じのいい人達ばかり。素直な会話の成立に心温まる思いでした。この大学生、学長をされたフルブライト氏も気さくで、フレンドリーな“conversationalist”だったとキャンパス内のフルブライト像設置に関わった建築家が述べています。〈次項目に〉

(2) フルブライト像 (Fulbright Statue) 〈ここは像を作った方、ベイダー氏の言葉を原文で〉 : [This Arkansas man] is standing with his hands inside his pockets as if he were ready to engage in **friendly communication** with those around him. According to Gretta Bader, the artist who created this sculpture, “What I tried to do was to capture the intensity, the accessibility, and the physical liveliness...the sculpture to speak to all of us, particularly to the students that he is **ready for a good conversation.**” (*The Fulbrighter*, Winter 2007, No. 27) 〈もう一つの特色は後述〉

(3) 気さくに、気軽に会話が始まる言葉の世界に合わせて、この大学は好奇心や向上心が校訓になっています : Veritate Duce Progredi. (Advance with Truth as our Leader, *探究せよ、真理こそ我らのしるべなり) *cf. inquiring mind 〈キャンパス・ツアーの Peace Fountain の項参照〉

J. William Fulbright College の3つの特色

アーカンソー大学には元学長であり上議員委員であったフルブライト氏の活躍を記念し、その名前を冠とした学部・研究科 (William Fulbright Colleges of Arts and Sciences の学部・研究科) が大きな特色になっています。フルブライトの国際性に特化し、そこを専門的に教育・研究するため3学科 (歴史・政治・外国語)、1プログラム (国際関係学)、5学際研究学科 (アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカ・中東・ロシア) の計9研究領域が制度化されています。全領域を通して共通点を大学公開パンフレットより要約してみました。

(1) 学習環境 : Smaller **discussion-based environment, open dialogue**

(2) 学習方法 : Classes emphasizing **critical thinking, dialogical lecture, not passive recipient of knowledge**

(3) 国際交流 : Fund for study and research abroad (留学アドバイス : the common bond of **human dignity is recognized as the essential bond for a peaceful world**)

ここ20年間日本の高等教育 (世界に有用性のある教育をめざした文部科学省イニシアティブあり) で繰り返し、繰り返し強調されている (Not many people do it. 現状!?) 「双方向型」の授業形態、知識を受身的に受け取るのではなく、批判的に考える思考様式が前

面にできています。一人ひとりの人間性尊重の人権思想と世界平和思想の関係を大切にしたい。三大特色がこの大学の教育の力点になっています。

パービス (Hayt Purvis) 教授に会って

(1) フルブライト・ジャパンの広報・情報部の方から紹介を受けたパービス氏に研究室でお会いしました。現ジャーナリズム学科教授、ディレクター (Fulbright Institute)。フルブライト上院議員。(フルブライト上院議員時代に密着した形で広報官を7年間された方です)。

(2) お会いし、フランクに開口一番、フルブライト生涯の緊張に富む実話(裏話)を聞きました: アドキンズ (Homer Adkins, 州知事) との全面確執の“フルゲーム”。全米最年少34歳フルブライト学長はアドキン州知事より卒業式 (the commencement day) に解任。フルブライト氏はそれをバネに政治の世界に出馬、1943年下院議員。そして1944年上院議員選挙戦で対抗馬のアドキンを破る。パービス氏はこのリベンジを“**Fulbright won the political game after all.**”と愉快地話してくれました。タイムアウトした3年後のフルブライトの勝利でした。

(3) 日本の Fulbright Alumni にパービス氏よりメッセージをいただきました。

Among the many benefits of the Fulbright Program is **the ongoing contact** within the Fulbright network of kindred spirits who are committed to advancing **mutual understanding**. Senator Fulbright believed very strongly that we **could and should learn from each other** and that this is a **continuing process** which the Fulbright set in motion. (*The Fulbrighter*, No. 31, Spring 2013)

(相互理解促進のためフルブライト関係者の連携、また相互の学び合いの継続は可能であるし、義務でもある。持続可能性がフルブライトのつけた方向)

キャンパス・ツアー

(1) パービス教授との懇談インタビューの後、案内してもらった最初の場所はフルブライト像 (Stature of Fulbright) であった。フルブライトと勿頸の友であるクリントン元大統領 (1993~2001、アーカンソー州知事2期1979~81, 1983~1992) は除幕式スピーチでフルブライトとアメリカの関係について次のように語られた。(The Fulbrighter, Winter 2007, No. 27)

...the remark that Fulbright believed that “the best thing America could do was to be an intelligent example to the world through material helpfulness ***without moral presumption**, that we should make our own society an example of human happiness.... (加瀬、“大地と人間と文化”、『からしだね、39号』 四国学院大学英文学会、2008) (アメリカの世界に対する援助の根底に、大国の「独善」が暗黙の前提にならぬように、援助を通してアメリカ社会を人々の幸せの実例に、とフルブライトは信じていたと思う)。

(2) <回覧のポスターをご覧ください> **Peace Fountain** の写真の下に書かれている英文は: The highest function of higher education is the teaching of things in perspective, toward the purposes of enriching the life of the individual, cultivating **the free and inquiring mind**, and

advancing the effort to bring **reason, justice, and humanity** into the relations of man and nations.

(ポスター、Dedicated to Peace through Education, University of Arkansas, October 24, 1998) 人間の豊かさを目指し、自由闊達、旺盛な探究心を促進し、reason (理性)・justice (正義)・humanity (人間性) を人と国家間にとこれらの高等教育の理念をいやがおうにも強調しています。<詳細は後述>

(3) **Senior Walk**: the University's longest tradition in miles and as well as years (*The Fulbrighter*, No. 31) 大学開学 (実際は1904年) 以来卒業生 (4年生時に) 15万の名前をキャンパス内の歩道に彫り込んだ9キロが延々と続いています。1924年のところにくっきりとJW Fulbright とありました。歩道上とはいえ、その上はおそれ多くて歩けませんでした。一人ひとりをお大切に human dignity の尊重がこのような形で残されていました (同窓会 (homecoming) 必訪の地と聞く)。フルブライトの“人物交流”の源はここにあったような気がしました。

フルブライトとアメリカ社会

(1) 第二次世界大戦の終戦前、新たな国際平和と安全保障の維持のために、国際平和機構設立決議 (**Fulbright-Connally Resolution**, September 21-November 5, 1943) を提案・承認 (下院と上院)。次の英文は恒久的平和機関：国連設置に至る最初の提唱者フルブライト氏の一連の両院の経緯と内容です。<趣旨と時期は太字の英文を読んでください>

On September 21st, the U.S. House of Representatives approved the Fulbright Resolution. Representatives J.W. Fulbright (Arkansas) called for **the creation of an international organization with the power to establish and maintain a just and lasting peace**. The resolution also included U.S. participation in this organization through the constitutional process. Senator Tom Connally (Texas) introduced a similar resolution in the Senate, which passed on November 5th....

Resolved, (中略) That the United States, acting through its constitutional processes, join with free and sovereign nations in **the establishment and maintenance of international authority with power to prevent aggression and to preserve the peace of the world**. That the Senate recognizes the necessity of there being established at **the earliest practicable date a general international organization**, based on the principle of the sovereign equality of all peace-loving states, and open to membership by all such states, large and small, for **the maintenance of international peace and security**. (Documents Pertaining To American Interest In Establishing A Lasting World Peace, Pamphlet No. 4, *PILLARS OF PEACE* January 1941-February 1946)

(2) 1950年代はマッカーシー (ウィスコンシン出身の上院議員、John McCarthy) による“赤狩り”旋風 (Red Scare) の時代でした。ある国からのフルブライト・プログラム奨学生がターゲットにされました。公安調査委員会で (1953年) アンフェアな捜査手段に対してもフルブライトは毅然と発言。“もしそういう人物がいるとしたら、そうでない数多くの奨学生のことも同時に記録すべし” (近藤健『もうひとつの日米関係』The Japan Times, 1992)。“a sympathizer and Half Bright”といった中傷 (“name-calling”) も。(ビデオ、

日米教育委員会『日米フルブライト交流計画の50年』(2002) このような“画一性”の雰囲気時代の多く人はマッカーシー (John Birch Society) に尻込みをしていました (the reluctance of being identified with public criticism of McCarthy)。当時マッカーシー上院議員と対決する議員はいませんでした。“世間の世論”という名の社会風潮・社会心理を“the power of the air”と言ったらいいのでしょうか)。しかしフルブライトは人や世相におもねるではなく、事柄にそって一貫性を持った勇氣ある人物 (反対したのはフルブライト一人の委員会もあり) でした。流されない男 (a man of integrity) としてのフルブライト氏は歴史的、社会的文脈の中では a brave guy (勇敢な人)、“principled” dissent (物事の原則に基づいて反論する人)、non-opportunist (日和見をしない人) と言ったらよいのでしょうか。執拗な“捜査”があちこちで荒れ狂う中、ぶれのないフルブライトの不動の信念によりマッカーシーはこれ以上関わってはきませんでした。

(3) フルブライトはジョンソン大統領とは家族ぐるみの付き合いをしていました。残念ながら、ベトナム戦争拡大についてジョンソン大統領は話し合いに応じようとはせず、決裂し2人は袂を分かつ事に。戦争エスカレート (北爆) により、戦費増大。フルブライト奨学金資金も大激減。(フルブライト上院議員に対するジョンソン大統領のリベンジ?)。1960年代の終わりから70年代の初めにかけて資金は半減以下 (対日奨学金資金は1/2~1/3に減少) で科学、芸術分野が奨学金の対象外。このようなフルブライト計画の二大財政危機がマッカーシー時代とベトナム戦争時期にありました。

フルブライトの信念：理性・正義・人間性の“三位一体” (*Trinity) (*教父トリトウリアヌスが「父」・「子」・「霊」の三位格が神の本質において一体との説明用語として230年頃初めて使った。“関係性”の説明としてはアーサー・ケストラーのイメージとして「亜全体 (holon, 全体子)」やメタファーとしての「玄関は内・外か」(加瀬『異文化間コミュニケーション』ユネスコ講演、1992に近い)。

(1) フルブライトの「三位」：理性・正義・人間性について以下話題性の高い部分にポイント (“topicalization”, Kase’s coinage) を当ててみます。

Reason (理性)：ある見方を設定すれば、そのことによってある事が浮き彫りにされます。理性についてはいろいろな観点から語られることがよくありますが、ここでは言語と思考の点から考えていきます。まず、reason と reasoning について2つの側面 (言語力と洞察力) に焦点を当てて“思索”してみたいと思います。後述の人間性 (humanity) の困難部分：反感にも**理性的手段**で (暴力・武力・激昂・ヒステリー：NG)。言葉を使って、言葉をつくして。沈黙は“禁”。ものの見方そのものについて話しあい、相手のものの考え方を理解、また自分の方も。双方向が。“理解のしなおし”が最重要。

前述のクリントンの除幕式スピーチ：“I admire him [Fulbright]. I like him. On the occasions we disagreed, I love arguing with him.” 意見が合わない時には、相手のことが分か

り、自分のことも伝える機会（仲良くケンカしな：努力目標→努力義務）。 I [Clinton] never loved getting in an argument with anybody as much as in my entire life as I loved fighting with Bill Fulbright. I'm quite sure I always lost, and yet he managed to make me think I might have won. (クリントンにとってフルブライトとの議論は人生で一番たのしい時、結局フルブライトにはかなわないのだが。勝てると思わせてくれるのが彼のやり方。要は相手を巻き込んでその気にさせるのがフルブライト流。対立を避けるのではなくトコトン話しあって解決、がフルブライトの思想（緊張は“刺激”。刺激があるからチャレンジ、との積極性）。恐怖心から相互不信が見え隠れする国際社会には、特に粘り強い協議能力が当然要請されます。異文化接触・理解には言葉、言葉、言葉の discussion & argument & negotiation が必要。Talk to death!?! <アーカンソー出身の上院議員フルブライトの活躍の地、首都ワシントン D.C.の言葉の議論パワーについては配布資料（Fulbrighter, Spring 2013, No.31 より）参照> 言語力を駆使した理性は紛争に対する“予防医学”といえましょう。

リーダーシップは双方もしくは複数の事例に共通する本質の問題点を苦も無く見抜く力がその資質とよくいわれます。当面の問題の表面をはぎ取ると（理性的に）その問題と同じ本質を持った他の事項がみえてきます。（一見無関係のように見えても本質的には同質の問題）。タイミングよく思いつく社会文化的な洞察力は理性のパワー：第二次世界大戦終結直後の現存（当時）軍需品を世界平和推進基金に“読み替え”。新しい計画の実現は新たなアメリカ市民からの税金によるのではなく、処理対象物（総余剰財産）を利用・活用。そしてそれを全部使った人物国際交流プログラムを提案、批准。“国家財産”を“人々の財産”に変更、でした。理性（reason）とは状況の中でいろいろ考える事（reasoning）。

Justice（正義） <ここは何かはっきりとした結論をだすのではなく open discussion で。まず、正義の論議の前の基本的分類から>

<フルブライト and/or ハーバード関連の正義論の紹介を要約します>

ロールズ (John Rawls) 1921~2002 ハーバード大教授 フルブライト・スカラー。Oxford へ。「リベラリズム」：社会的正義論（格差原理）、社会的な格差を問題にする。

ノージック (Robert Nozick) 1938~2002 ハーバード大教授 フルブライト・スカラー。Oxford へ。「リバリタリアニズム」：自然権的正義、個人本人の努力を高く評価する。」

サンデル (Michael Sandel) 1953~ ハーバード大教授

「コミュニタリアニズム」：個人を超え共同体の中での共通する善が正義。NHK 白熱教室 *What's the right thing to do?* 『これから「正義」の話をしよう』で放映。

Cf. 正義、justice：プラトンの正義論、アリストテレスの正義論以外の基本分類（ウィキペディア百科辞典より）[日本語訳一部編集]：retributive justice（報復的正義）；“目には目を、歯には歯を”といった同一の状態での報復、restorative justice（修復的正義）；刑事上の概念で自己の行為を反省し、被害者もそれを通して自己の受けた被害を納得いくまで考える双方のプロセス、distributive justice（配分的正義）、corrective justice（矯正的正義）；返還や放棄。他、法に関する「テミス」の正義や、カントの正義論等々、諸分類あり。

今は行政や教育において評価が当たり前になっています。また“辛口”は傾聴すべき（内部批判・外部評価等）時代ともいえます。利害関係で正義を振りかざすのではなく、また損得で時流におもねるのでもなく、良識と人道に基づく*“正義”感（観）からの内部批判ができるのは、組織（や制度）が健全な証拠（愛教大附中『鴻鵠』No. 134, 2013）。（本来、正義“justice”はちょうどの“just”。日本語は「正」と「義」との結合で重々しい。“That’s right.”）

*フルブライトの著作、*The Arrogance of Power* に対する Max Frankel は *New York Times Book Review* で次のように述べています。“True to himself, Mr. Fulbright conveys his outrage in calm often elegant prose...It is an invaluable antidote to the official rhetoric of government.”（自分自身に対して**正直に義憤**（正義）を“理性的”に、冷静・優雅に政府の外交政策に抗して反対意見。政府の「権力」によるレトリックに対する重要な解毒剤）

前述のサンデル流の“What’s the right thing to do?”をフルブライトは正直に出し続けていったのでした。フルブライトはその一貫性・継続性・整合性のある正義（justice）に基づいて上院議員としての生涯を本気で送った人だったと思います。 e.g. アメリカ外交委員長フルブライトにとってベトナム戦争時の外交方針の内部批判は“the right thing to do”。 <前述>

Humanity（人間性）

人物交流の国際現場は、厳しくいうと単なる相互交流ではなく、敵意と反感の渦巻く世界。地道な和解の努力が必要で、“異文化”に対しては人間の力量が問われるところです。**NOT simple reciprocity, making an effort to reconcile the warring element of a hostile world...an important difference to exercise their skills.**（加瀬、“大地と人間と文化”『からしだね、39号』四国学院大学、2008）。国際人物交流は、予想不能の状況にさらされる現場遭遇がありますが、そんな時、とかく人は *ad hominem*（人身攻撃）と受け取り（受け取られ）がちです。しかし、国際社会は人間共通の恐れや不安や友情をもった生身（*common humanity*）の「人」と「人」が行き来しているのがもう一つの大切な現実です。こんな中で「力」による政策をよりは国際関係を“人間的に”、人間化（*humanization*）の方向をフルブライトは望んでいました。

繰り返しになりますが、（意識的）国際人物交流現場ではそれぞれ互いに学び合うことができるし（could）、また学び合うべきである（should）と元フルブライト広報官、ハービス教授は力説しています。“People don’t argue about the merit of the case.”（物事の個別の価値を大切なものとして論じない）が現実の風潮です。しかし、こんなコミュニケーション回避行動に逃げ込むのではなく、本来の対象に素直に向かい合い、直視し、内容・中身や事項・事柄に即して発想し、思考し、発信していったのが外交委員長、フルブライトでした。それが彼のエトス。正しい事には妥協のない高潔なたましいを持った国際的大人物（*international extraordinaire*）といえましょう。ともかく国際人物交流で“powerful and wise”になれたら素晴らしいと思っています。humanity（人間性）は、その心構えを対象として論

じると同様に、フルブライター一人ひとりがその carrier ですので、少しでも平和と友好がそこから生まれればと思っています。結果よりは未来に（最終）ゴールを期待する（envisioning）といったフルブライトの“漸近主義”も感じ取れます（The Fulbright Program aims to bring a little more knowledge, a little more reason, and a little more compassion.）

人間の現実と社会の現実から未来の姿を結晶させたのがフルブライト人物交流プログラムの基本でした。この項の纏めとしてフルブライト・ジャパンの*ビデオの挿入のパンフレットから人物交流計画の主旨を日本語と英語で確認してみたいと思います。

「世界の平和を達成するためには人物の交流が最も有効である。」という確固たる信念に基づき、故 J. ウィリアム・フルブライト上院議員は、広島に原爆を投下されてわずか2週間後に、フルブライト計画の法案を米国議会で提出しました。この法案は、第二次世界大戦終了後間もない1946年に米国議会で、アメリカと諸外国との相互理解を目的とした人物交流計画「フルブライト・プログラム」として発足しました。以来半世紀の間に、フルブライト・プログラムは世界で最も広く知られ、権威ある人物交流プログラムに発展しました。

...an objective that is as relevant today as it was then. This program's foremost advocate, the late Senator J. W. Fulbright, believed people exchanges to be the most effective means of promoting world peace, and only two weeks after the dropping of the atomic bomb in Hiroshima, this bill was presented to Congress. In half century, the Fulbright Program has developed into the world's largest, best known and most prestigious educational exchange program.

人物交流は今も昔も変わらない教育交流計画であり、そこでの経験は国際社会の重要な資産がポイントです。

*ビデオ（日米教育委員会『日米フルブライト交流計画の50年』2002）内の挿入のパンフレットより

（2）三位一体の背景としての前提

社会の中で

話したり、書いたりする3項目のまとめは伝達行為にとっては有効な手段として定着していますが、それ以外の“三位”にはその背景に共通の「前提や目的」があるようです。それらについて“思索”できるものを箇条書でいくつか挙げてみます。

*「リーダーシップ」：「徳知体の三位一体」（この順序で。頂いた松下政経塾 The Matsushita Institute of Government and Management パンフレットより）

*「意識・行動変容」：「物語り」的三位一体：知(フーン、そうかと納得し)・情(ぐっと、感じた情熱で)・意(よし、やるぞと行動へ)

*「英語学習」：文法・読解・作文（かつて一世を風靡した村井・メドレー(泰文堂)の受験参考書、「三位一体総合英語の(新)研究」)

*「時系列にある human agency」：過去・現在・未来（過去を紡いで、現前の意味をつくり、

未来に投影) All three were invariably steeped in the past, actively engaged in an assessment of the present, and inspiringly cast toward the future. (加瀬、*Nisei Samurai*, 「文化変容と人間行動」学術出版会、2007) また I relied on the basic framework of human agency “as a capacity to contextualize past habits and future projects within the contingencies of the moment” in Mustafa Emirbayer, “What Is Agency?”, *American Journal of Sociology*, 1998

*「教会での祝福(Blessing)」:「三位一体」に対する非言語的儀式の一つの象徴行為(a thumb and two combined-fingers) <親指と隣接の指を2本づつくっつけると3つが構成される。< Shall we act it out?>

物語の中で

<前掲のスタインバックの『チャーリーとの旅：アメリカをもとめて』からフルブライトの3項目を考えてみました。粗々な“あてはめ”は“センチメンタル・ジャーニー”に免じてお許しください>

親子げんかを仲裁

「あきれた野心だよ。夜学で何を勉強したと思いますかね。ヘアドレッシングですよ、女の。わしが心配するのも、これでわかってもらえるでしょう」

ロビー青年はハムを切るのをやめ、こちらを向いた。右手に細身のナイフをぐっと握りしめていた。軽蔑の表情が浮かぶものと、こちらの顔色をさぐった。

私はいかめしい顔つき、考え深い顔つき、どちらにも味方しない顔つき、この三つをいっぺんに表情にだそうとした。(中略)「わしがどんなことをいってもどちらからか、やられるからね。中間にはまって身動きがとれないよ」

父親は深く息を吸い、ゆっくりはき出した。「うん、ほんとうにあんたのいうとおりだ」といい、それからクスリと笑った。それで部屋の中の緊張はほぐれた

*「ナイフをぐっと握りしめていた。軽蔑の表情が浮かぶものと」:世間での価値観に対して不信と反感から、この人も(どうせ)同じ、と思い込む。そして決めつける。

*「いかめしい顔つき、考え深い顔つき、どちらにも味方しない顔つき」:状況をかなり理性的に考えた適切なスタンス。

*「表情にだそう」:“the right thing to do”(正義)。

*「どんなことをいってもどちらからか、やられるからね。中間にはまって身動きがとれないよ・・・緊張はほぐれた」:その場から逃げださないで(現場主義)。主体をかけ、人間性から発した言葉で関わった。そして緊張場面に本音を使った人間性により平和的、友好的な状況が誕生。

(3)フルブライトの信念:“理性(reason)・正義(justice)・人間性(humanity)”の三位一体(trinity)の(大)前提は

それでは三位一体の「一体」は“一体全体”何でしょうか?“一体”は「全体」、「全体」

は「一体」、何か禅問答のようになってしまいました。要は、掲げた3つに理念(“manifesto”)にはそれぞれの背景にしかるべき前提が存在し、“手段”、“方向”、“目標”のような形であらわれている、と考えています。また「三位」は相補の関係であるよりは、相乗的な関わりもあると思いますし、それらを有効にするためのビジョン (perspective) が前提として付いています。フルブライトの場合、**The Free and Inquiring Mind** (自由闊達と探究心旺盛なマインド) が必要不可欠な大前提。結果からみて、発展的に言えば、こういった自由な探究のマインドからは世界的な偉業も産まれてくる事でしょう。(いろいろな活躍の領域があると思いますが、日米フルブライト同窓生からはノーベル賞受賞者が5人。他の多くは今日、教育・政治・経済・法曹・情報等で活躍中。<具体的な社会貢献は日米教育委員会『フルブライト経験がつくるグローバルリーダー』日英語リーフレット参照>

<回覧中の Peace Fountain のポスターをご覧ください> 関連個所再掲: The highest function of higher education is the teaching of things in **perspective**... **cultivating the free and inquiring mind**, and **advancing the effort to bring reason, justice, and humanity** into the relations of man and nations.

こういったマインドを育成し、人と国家間の関係に理性 (reason)・正義 (justice)・人間性 (humanity)をもたらす努力を推進するのが高等教育最高の役割。この教育ビジョンで国際人物交流最重視。これらの三つの value: reason, justice, humanity の根底には「自由」と「探究」する“頭と心”(MIND)が編みこまれ、“Trinity (三位一体)”が「関係学」の言葉の候補としては最適であろう。

フルブライト自身は、友好的な人柄 (friendly character)、首尾一貫した信念 (unfailing belief)、世界的な理想 (worldwide vision) の持ち主だったと思います。これはフルブライトのパーソナリティーの三位一体?!そしてまた Peace Fountain に掲げられたフルブライトの国際教育のビジョン (perspective) に、フルブライト自身の生涯も重なり合っていたと理解しています。

終りに

理念と理想を持ったフルブライト留学計画は60年がちょうど過ぎたところでは。荒唐とか崩壊といった言葉が日常語になっている現代日本。しかし「グローバル・スタンダード」、「異文化間コミュニケーション」、「国際理解教育」、「発信型言語運用」等々の「言語・社会・国際」に関する可能性が、今まで以上に大きな響きを持っているのも今の日本です。明日の地平を切り拓くのがビジョンです。その豊かな裏付けがフルブライトの「国際人物交流」と信じています。フルブライト60周年記念事業のテーマは「あしたを拓く/Paving the Path—Envisioning the Future」(The *Fulbrighter*, Spring 2013, No. 31, フルブライト・ジャパン)でした。このような時期に、私の場合、フレンドリーな人々との出会いを楽しみながら、フルブライト精神の原点にある信念、またここから生まれた人物交流プログラムについてあれこれ思い巡らしながら、走り走った1万マイルのアメリカ大陸でした。

最後に、講演会にあたり、フルブライト・ジャパンの広報・情報アソシエート、生形潤氏と事務局長アシスタント、小澤真理子氏に情報・資料提供等で非常にお世話になった旨を付し、謝辞とさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

<参考>

フルブライト (J. William Fulbright, 1905-95)

- * 1925 : アーカンソー大学卒業 (学生時代 Razorback Football Team)
- * 1928 : ローズ奨学金 (人格・スポーツ・指導力がポイント) で Oxford 大学院に留学、修了
- * 1934 : George Washington 大学ロースクール修了
- * 1939~41 : アーカンソー大学学長
- * 1943 (1月3日) ~ 45 (1月3日) : 下院議員
- * 1945 (1月3日) ~ 74 (12月31日) : 上院議員
- * 1959 (1月3日) ~ 74 (12月31日) : 外交委員会委員長
- * 1995 : Fayetteville の Evergreen 墓地に

フルブライト・プログラム (日本関連中心)

- * 1952年フルブライト・プログラム留学開始 (1949~52年 ガリオア・プログラム)
- * 1961年 Fulbright-Hays Act JFK 大統領が署名。Congressional appropriation 可
- * 1979年 これより日本政府資金分担計画始まる。(拠出金は次年度より) 「在日アメリカ合衆国教育委員会」 → 「日米教育委員会」
- * 1982年 (30周年記念) ガリオア・フルブライト同窓会結成期
- * 1986年 記念財団設立
- * 1992年 (40周年) cf. 近藤健『もう一つの日米関係：フルブライト教育交流の四十年』The Japan Times
- * 2002年 (50周年記念) cf. 賀来景英・平野健一郎編『21世紀の国際的交流と日本：日米フルブライト50年を踏まえて』中央公論新社。ビデオ：日米教育委員会『日米フルブライト交流計画の50年：平和への架け橋[第1部]・フルブライト精神を受け継ぐ者たち[第2部]』(明石前国連事務次長のコメント等多)
- * 2006年 フルブライト生誕100周年記念
- * 2012年 (60周年)